

## 村落の構造分析について

— 体制との接点に関する社会学的問題 —

布施鉄治

村落の構造を分析的にあきらかにするさい、それを全体社会の歴史的文脈の中であきらかにすることは社会学からの構造分析にとつて、さきわめて大切なことである。しかしこのことは単に、その村落の土地の所有形態をあきらかにして、それうらすけされたものとして、社会関係のレベルでの構造をとりおさえるといふ以上の分析視角を必要としている。これまでの村落構造の体制の中への位置づけの試みは、例えば田原音和氏の指摘するように、経済的な分析視角と社会学的な分析視角の「不幸な誤解」といわれるべき側面をもつてゐたが、けれども、接合ではなしに、社会学的な一つの方法論として、体制との接点を見失なわずに村落構造をとらえるための統一的な手つきとは、どうしても考えられる必要がある。

われわれが具体的にワイルドに入つた場合、「村落」という形で擇出すべき対象をどこにおいたらよいか、ということにまず当面する。あるものは行政的な単位である部落を、あるものは自然村を、あるものは周族のネット・ワークをという形で、それぞれの「家庭」の単位をよりだすわけだが、現実の農村

社会の中にはさまざまの人間関係のネット・

ワークが複雑にいりみだれでいるので、どこ

からどこまでを「村落」としてとりだすのか、

この点をまず明確にする必要がある。従来、

日本村落構造の基本的な結合形式を問う結合

構造の中ではたす機能そのものが、全体社会

の構造的な変化のなかで、したいに変化して

きていることは明らかであるので、これを大

きのあしがかりとする事とはできない。これ

は常数ではなくして變數として考えられる

べき性質のものであると思う。分析のさいの

第一のあしがかりは、少くとも村落をそれ自

体一つの世界として機能的に結びつけている

「生産組織」としてとらえる観点であると私

は思っている。ここで私が才一に村落を「生

産組織」として把握する観点を強調するのは、

実は全体社会の生産諸関係そのものが、この

生産組織としての村落のワーク組を規定してい

る関係が存在するからである。個人の農家の

すべての生産過程を充足させるために必要な

社会関係の成立の契機そのものを、ます全体

社会の生産諸関係がかたく規定している。こ

こには個々の生産主体者の意志如何にかくわ

りなく「*エコロジー*」に規定された社会関係

のワーク組がある。たとえば、北海道の戦後開拓農村のばあい、彼らはその生産過程を充足

するためには農協の下部組織としての実行組合組織にいやがおうでも参与しなければなら

ないし、この組織はいわばそこでの生存条件としての「*エコロジー*」なワーク組である。こ

れと同時に、行政の下部末端組織である終端組織がその下部の区の組織も *exterior* に与えられたワタ組として存在する。この部会組織がそのまま税組として機能しているところも少くはない。

しかししながら、このようないふつの輪ともいふべき「external」なワク組は全体社会の生産諸関係の変化にともなつて、つねに変化してきたもので、また変化をかさねるものである。そうして、この「external」なワク組に規定されてあらたな「internal」な社会関係が生ずるし、また従来の「internal」な社会関係は変容をかさねて行つている。このようにみてくると、たとえば鈴木栄太郎博士の分類された農村の社会集団をすべて同じ「external」でみると、わけには行かなくなる。  
な体制のレベルからのワク組によって成立されている生産組織としての機能をもつ集団と、行政的組織としての機能をもつ集団と他の社会集団とは一応わけて考えてみる必要があると思われる。

しかし、村落を一つの生産組織として、また行政組織として、とらえるということは同時に、村落のリーダーシップ構造をあきらかにすることにもなる。つまり、それを組織体としてとらえる以上、その組織としての活動目標と結びついたその組織体内部でのリーダー・シップ構造があきらかにされなければならなくなる。村落構造をあきらかにするためには、それを集団の地域への累積構造としてみる上からのレントゲンとともに、横から

階層構造をとらえるメントランも同時に必要である。しかし、このせい、さらに、現実的には、*Formal*な生産組織（体制の側から）に規定されたもの」と実際に生産組合の固まってきたる*Informal*な生産組織とは区別して差さなければならない。*Formal*な生産及び行政組織がヘンド・シント構造をなしていいる場合が少くはないし、*Formal*な生産及び行政組織はつねに*Informal*な生産組織や生活組織に肉づけされて、現実的に意味をもつて*internal system*を構成していると考えられるからである。

こゝにおいて、生産主体若の土地の所有形態とか、生産手段の共同体的所有とか、この*internal*な`syatene`を特色ずけるものとして意味をもつてくる。しかし、さらには、技術構造とか経営形態という中間項目も同時に入れて考えてみる必要がある。どういう技術段階にあり、どのような経営形態をもつているかということは、少くとも、土地の所用形態とともに、その村落内におけるリーダーシップ構造を特色づける規定的な要因を形成していると考えられるからである。

を内部から支えるものとして、土地の所有形態とか、技術体系、經營形態がその小作系の生産力の発展段階と生産諸關係の発展段階を示すものとして意味をもつてくる。これらは個々の生産主体者のもつ意味づけをはなれて客観的に分析できる単位である。

村落の社会構造を分析するということは、少くとも、これらの諸要因との構造的な関聯の中で、社会關係のレベルで、村落のリーダーシップ（あるいはヘッド・シップ）構造をあきらかにすることであると私は思っている。そうして社会關係のレベルでそれをあきらかにするということは、そのような客観的な經濟的な構造を、また行政的な統治構造を矛盾ないものとして支えさせている行動原理や、価値意向をあきらかにする仕事でもあるし、また独占資本が農民からの収奪を可能ならしめているその虚偽意識の構造と、さらにはあたらしく発展しつゝある農村の胎内に芽を咲かせる行動原理をさぐりあてる仕事でもあると思つてゐる。